

廃校を活用した学生プロジェクトによる空間デザイン

Spatial Design of utilization of closed public school by student group

- 藪谷祐介／富山大学 山田良／札幌市立大学
YABUTANI Yusuke / University of Toyama YAMADA Ryo / Sapporo City University
- Keywords Utilization of Closed Public Schools, Spatial Design, Student Project, Workshop

1. 研究の背景と目的

札幌市立大学は、文部科学省「地（知）拠点整備事業（COC事業）」の採択を受け、廃校となった旧真駒内緑小学校を活用した大学キャンパス（以下、COCキャンパス）を平成27年に設置した。COCキャンパスは、学生と地域住民が共に学び合うための「学び舎」をコンセプトに、地域志向型の教育・研究・社会貢献の活動拠点として整備された。ここでは授業だけでなく、公開講座などの大学の専門性を生かした様々な活動が展開され、多くの地域住民が訪れている。廃校活用においては、新たな用途に合わせて空間デザインをする必要がある。COCキャンパスでは学生が主体となり、地域住民を対象としたワークショップ（以下、WS）を用いながら空間デザインを行うことで、学生に対する教育効果など様々な効果が期待できる。そこで本研究は、廃校を活用した大学キャンパスの空間デザインを学生プロジェクトとして実施し、そのプロセスの記録・考察を行うことで、手法化に向けた特徴と課題を整理することを目的とする。なお、本研究における学生プロジェクトとは、学生が主体的にアイデア出しから、計画立案、図面作成、WSの企画・実施までを行い、教員は指導的・支援的立場で関与する手法である。

2. 研究方法

札幌市立大学COCキャンパス内にある「まちの図書室・談話室」を空間デザインの対象とする。この室は、開館時間中、学生だけでなく地域住民も自由に入出入りすることできるため、その特性上、本研究対象に適している。本研究を実施するにあたり、札幌市立大学デザイン学部3年生5名の協力を得た。「まちの図書室・談話室」の設置趣旨である「地域住民が気軽に集まって交流できる談話の場をつくること」を実現するための空間デザインを課題とした。教員による指導・助言のもと、学生が主体的にアイデア出しから、計画立案、図面作成、WSの企画・実施、施工までを行った。それらを記録・考察し、特徴・課題を整理した。研究期間は、平成27年6月～平成28年3月である。

3. ハジメタイプロジェクトと活動内容

「まちの図書室・談話室」において、何かを始めたい人が

出会い、実現していくプロセスを共有することで交流の機会が創出できると考え、「ハジメタイ」プロジェクトを立ち上げた。「アイデアの生まれる場づくり」をコンセプトに、「こくばんのいえ」、「作業用テーブル」の制作やそれに関連するWSを実施した。WS・制作活動の概要は、以下の通りである。

1) 小さなこくばんづくり WS

ものづくりの楽しさを体験してもらうために、木片に黒板塗料を塗って、「小さなこくばん」を作るWSを、子どもを対象に実施した（図1）。参加者は48名で、近隣の小学校にチラシを配布して告知をした。このWSは、旧真駒内緑小学校跡利用施設・まこまるで開催された「まこマルシェ」（主催 札幌市）の一部として実施し、翌週に予定していた「こくばんのいえWS」の告知も兼ねた。当日は、学生4名が運営に携わり、WSの進行から子どもたちが塗装するサポートまで行った。学生の作成した報告書には、親が指示する場面が見られたので子どもがより主体的に取り組める工夫や作業工程の明示の必要性が挙げられた。地域住民から準備不足を指摘される場面もあった。

2) 「こくばんのいえ」WS

発想したアイデアを広げるための場づくりのため、壁や屋根にチョークで絵や字を描くことのできる「こくばんのいえ」を制作するWSを開催した（図2、図3）。参加者は15名で、親子での参加が目立った。小さなこくばんづくりWSへの参加者も見られた。WSは、①壁や屋根の材料に黒板塗料を塗る、②組み立てる、③壁や屋根にチョークでやりたいことを描く、という流れで実施した。ただし、組み立てをすべてWS中に行うことは時間制約上難しいため、事前に柱・梁等の骨組みを組み立てて行った。塗装の乾燥の待ち時間には、完成したいえに取り付けるモビールづくりを行った。「こくばんのいえ」の制作にあたって、学生らは構造物の強度やプロポーションを確認するため、1/1スケールの試作を行った。また、WSの運営では、学生は工具の使い方や組み立て方を参加者に指導し、学生と参加者、さらには参加者どうしのコミュニケーションが生まれた。

3) 「Reverse Table」の制作

発想したアイデアを形にするためのツールとして、天板がリバーシブルの「Reverse Table」を制作した（図4）。これは、



図1. 小さなこくばんづくりWSの様子



図2. 「こくばんのいえ」WSの様子



図3. 完成した「こくばんのいえ」



図4. 「Reverse Table」



図5. やってみたいをつなげようWSの様子

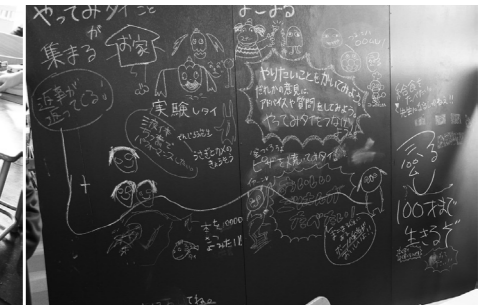


図6. やってみたいをつなげようWSの成果

不貞寝用の芝生やカッターマット、黒板が天板の裏に設けられており、気分や状況によって裏返し、自由に使い分けができるものである。制作には、技術と時間を要するため、WS形式ではなく、教員と学生が共同で制作した。天板は、シナ合板を2枚重ね合わせ、上面1枚はリバーシブルできるように真ん中を10枚の正方形に切り抜いた。また、かつて使われていた学習機の天板を取り外して脚を再活用し、小学校の記憶を継承した。これにより、学習機の高さを大人でも使用できる高さで調整することができた。制作したテーブルの設置後、施設の管理者や利用者から、「テーブルの角のアルを大きくして欲しい」等のいくつかの意見・要望が得られ、改良を行った。

4) やってみたいをつなげようWS

まこまるで開催されたイベント「まこ×まち2016」に合わせて、「まちの図書室・談話室」に「こくばんのいえ」を設置し、使い方を検討するために「やってみたいをつなげようWS」を開催した（図5、図6）。このWSは、「こくばんのいえ」の壁に実現したいことを書くと、それに対して何らかの手助けをしてあげられる人がレスポンスを返すというものである。学生が施設利用者の参加を促した結果、子どもから大人まで様々な世代の方が「こくばんのいえ」にやりたいことやそれに対するレスポンスを書き込み、こくばんのいえを媒体にしたコミュニケーションが生まれた。また、今回「こくばんのいえ」を設置することで、「3枚の合板でできた壁が閉鎖感をもたらすため窓を明けたら良い」「車いす利用者の動線の確保が課題である」など、施設の管理者・運営者からの意見を得た。

4. 考察・まとめ

以上より、プロジェクトの特徴と課題を整理する。

<特徴>

- ①制作過程にWSを取り入れることで、学生が制作の仕方を教えたり、地域住民が課題を指摘する等の「学生と地域住民の学び合いによる交流の機会」が生まれた。
 - ②プロの仕事に比べると制作物に荒さが見られ、施設の利用者・運営者から改良点等の様々な意見を得られた。「制作物を媒体としたコミュニケーション」が生まれた。
 - ③1/1スケールのプロトタイプを制作しながら、意匠的・構造的検証を行い制作することで、体験的に空間デザインを学ぶことができた。また、実際に設置することで利用者・運営者・管理者から意見が得られ、改良することができた。このように、「実践を通した学生への教育効果」が見られた。
 - ④教員から指示を与えるのではなく、学生が主体的に制作物の活用を促すWSを企画・実施する等、「学生の主体的参加」が見られた。
- <課題>
- ⑤スケジュール通りに進まないことがあり、そのためWSにおいて準備不足が見られ、地域住民から指摘される場面もあった。「スケジュール管理」が課題である。
 - ⑥情報共有の不足に伴う修正に時間的ロスが生まれた。プロジェクトを進める際には、「教員と学生の緻密な情報共有」が必要である。

以上のように、本研究ではCOCキャンパスの空間デザインを学生プロジェクトとして実施することで、「学生と地域住民の学び合いによる交流の機会」「制作物を媒体としたコミュニケーション」「実践を通した学生への教育効果」「学生の主体的参加」の4つの特徴と「スケジュール管理」「学生と教員の緻密な情報共有」の2つの課題を整理した。

※本研究は札幌市立大学COC共同研究費の助成を受けて行った。